

2023年度 地域連携活動助成金 活動成果報告書

1 活動概要

活動団体名	明治大学経営学部 藤江ゼミナール
活動テーマ	和製ハッカを核とした地域・産業・企業のレジリエンスとイノベーション
活動期間	2023年6月29日 ～ 2025年3月31日
主な活動場所	北海道北見市
連携地域 連携団体等	北海道北見市、北見市商工会議所、北見ハッカ通商株式会社等
活動者数	学生8名、教員1名 計9名 ※ 活動に参加した本大学の教職員及び学生の人数を入力してください。

2 活動内容 ※活動内容や活動成果は地域連携センターHP 等で公表します。

活動目的（地域が抱える課題との関係や活動により期待される効果等、本活動が地域の課題解決や活性化につながる事が分かるように記入してください。）

北海道北見市は北海道の東部に位置し、人口約 11 万 7 千人のオホーツク圏最大の中心都市で、人と物が集まる地域です。2006 年 3 月 5 日に北見市、端野町、常呂町、留辺蘂町が合併し、新「北見市」が誕生しました。戦前の北見市は 1900 年から栽培が始まったハッカ（薄荷）生産が盛んで、1939 年には世界の 7 割を生産したというハッカで栄えた地域ですが、第二次大戦後は、海外からの輸入自由化、更には合成ハッカの進出や人件費高騰などにより、製品原価が上がり、衰退の一途をたどり、1983 年 3 月末には、唯一の和製ハッカ工場であった「ホクレン北見薄荷工場」が閉鎖となりました。この和製ハッカの生産、精製を絶やしてはいけなかったとして、翌 84 年、初代社長永田武彦が家業の永田製飴から独立起業し、その後、二代目の現社長永田裕一（本学 0B）が継承している会社が北見ハッカ通商です。

北見市は、現在はオホーツク地域の商工業・サービス業の中核となっており、農業では、玉葱の生産が盛んですが、人口、企業、農家数何れも減少傾向にあり、カーリング発祥の地である常呂を中心にスポーツ振興で交流人口を増やすことや観光が課題となっており、その解決が期待されています。また、ハッカ生産や精製、応用、販売、交流人口の増加などにおいて、市や大学などの高等教育機関との産学官連携による取り組みが活発に行われています。

藤江ゼミは「モノづくりの心を学ぶこと」を目標に、全国の地域を支える地域中核企業の調査研究を行ってきていますが、「和製ハッカを核とした地域・産業・企業のレジリエンスとイノベーション」を地域連携における取組課題として位置づけています。2010 年からゼミでの訪問（合宿）を始め、北見市の社会、文化、産業等の歴史を学修するとともに、和製ハッカ製品についての新製品開発のアイデアづくりを当該企業と連携を進め、「小さなイノベーション」に取り組んできました。その一つの成果が 2013 年に誕生した明大オフィシャルグッズ「北海道のハッカ屋さんをつくったハッカ飴—なめらかミント」（学生の命名）です。この間、学生視点からの新製品のアイデアづくりや製品や包装デザイン、ネーミングをはじめ、販売方法などについても意見交換を続け、その代表ともいえる「なめらかミント」は明大マートの協力も得て、10 年以上販売を続けることができました。

本活動は、辻直孝北見市長はじめ歴代市長、副市長の表敬訪問を通じた地域課題の共有からスタートし、市内企業を訪問し各企業の課題共有とその解決への上記の取り組み、また、人手不足中で、コロナ禍を除き、毎年実施してきた市内仁頃での和製ハッカ畑（「北斗」等）の収穫増のための雑草取りなどを通じて、課題解決にむけて着実に成果を積み重ね、地域課題の解決や活性化に資してきました。地域連携活動助成金により、この目標実現のため、上記の活動の継続を目的とするものである。

活動計画（活動目的を達成するための具体的な計画や方法、申請団体と連携地域・団体等がそれぞれ担う役割、過年度の活動実績や次年度以降の継続性等について記入してください。）

1. 活動目的を達成するための具体的な計画や方法

活動目的を達成するためには、以下のような役割分担を考えている。

現地を訪問し、北見市、商工会議所、北見市内企業等を訪問し、こうした連携地域・団体等からは、地域の歴史を含む地域の現状、課題と今後の展望についての学習機会の創出、また、課題解決のため市を始め関係諸団体がどのような短期・中期・長期計画を立て、その実現のための実施体制を組んでいるのか等について申請団体に教示して頂くこと。

他方で、申請団体側では、地域課題を精確、正確に把握し、共有するとともに、諸課題について、学生の視点から地域の活性化、関係人口の増加策についてのアイデアの提示を行うこと、和製ハッカを活用した新製品のアイデアづくりや販売(宣伝含む)方法についてのアイデアづくりに取り組み、連携地域・団体と申請団体との連携の具体的成果を生み出していく。また、毎年、振り返りの共同作業も行う。

さらに、和製ハッカの収穫増のための、ハッカ畑(仁頃地区)での雑草取りがある。この作業は地味なものであるが、労働力不足の北見地区では、当該企業にとっても大変重要な作業となっている。これも、毎年継続していく。

2. これまでの取り組み

2010年9月 藤江ゼミナール2,3年生で初めて北見市を訪問し、北見市役所を訪問、市長、副市長と懇談、商工観光部訪問、商工会議所訪問を行い、地域の歴史、地域課題について学び、学生が直接アポイントを取った(株)北見ハッカ通商を訪問し、「和製ハッカの歴史と企業の沿革、現状、課題、展望について具体的に学びました。

2010年以降、コロナ禍が始まる2011年から2019年まで、毎年8月に北見市を訪問し、市長もしくは副市長訪問、商工観光課のレクチャー、市内企業訪問ヒアリング、また、北見工業大学との交流を行うとともに、活動の核となる北見ハッカ通商様との和製ハッカを利用した新製品についてのアイデア交換を行い、その具体化を進めました。また、これと同様に重要な、和製ハッカの収穫量を上げるための雑草取りを実施してきました。

その成果が上述の「なめらかミント」になりますが、2013年度の本学卒業式(3月26日)では、藤江ゼミが商品開発に携わった北見のハッカ飴「なめらかミント」が卒業式の日に販売されました。本学下記URLを参照下さい。

<https://www.meiji.ac.jp/keiei/info/2014/6t5h7p00000h8iuu.html>

コロナ禍の2020年から2021年にかけては、北見訪問は叶いませんでしたが、Zoomを利用したミーティングで永田裕一社長の講義と質疑応答を行い、活動を続けました。2022年11月には、大学の方針(活動制約)も緩和されてきたため、3年生で北見を訪問し、北見市の現状と上記課題についてのその後の取り組みについての現状を確認しました。

また、2022年8月には、3年振りに北見市を訪問し、コロナ禍前と同様の活動、すなわち、北見市の現状と地域課題の確認、北見ハッカ通商の新製品についてのアイデア交換、販売方法についての意見交換、ロコ・ソラーレの練習場でもあるカーリング施設(常呂地区)並びに北見市内の新施設の視察、そして、ハッカ記念館の振興策等について意見交換を行いました。

こうした経過を踏まえ、2023年6月末から7月初めにかけて、ゼミ4年生と北見を訪問し、上記の活動を継続して行う予定です。

次年度についても継続して取り組んでいく予定です。

また、申請団体(藤江ゼミ)のOBOGさらには、本学OBOGにもこうした取り組み参加して頂く方法についての検討も重要な課題として認識しており、この点についても、具体的検討を進めていく予定である。

活動スケジュール

2023年6月29日 現地調査(北見ハッカ通商社長幹部との打ち合わせ)

6月30日 ハッカ畑での除草作業 市内企業の方々から地域・企業振興についてのヒアリング

7月1日 北見市企業との打ち合わせ

2024年8月 北見市訪問(内容は、2023年と同じ内容を予定している。)

活動成果

I 地域の歴史、現状、課題と今後の展望についての学修

現地を訪問し、北見市、商工会議所、北見市内企業等を訪問し、こうした連携地域・団体等からは、地域の歴史を含む地域の現状、課題と今後の展望についての学習機会の創出、また、課題解決のため市を始め関係諸団体がどのような短期・中期・長期計画を立て、その実現のための実施体制を組んでいるのか等について申請団体に教示して頂くこと。

「和製ハッカを核とした地域・産業・企業のレジリエンスとイノベーション」というテーマに即して、北見と「北見ハッカ通商」の歴史は以下のようなものとなる。北見ハッカ通商代表取締役社長永田裕一氏から下記のことを学んだ。

(1) 北見市概観

北見市は旧北見市が1942年(昭和17年)に市制施行するにあたり、旧称の「野付牛(のつけうし)」から「北見」と改称、その後、2006(平成18)年に1市3町が合併し、現北見市(本庁を含む4自治区の編成)が誕生した。しかし、2021年に観光協会(4協会存在していた)のみが協会主導のもと合併が実現した。模索されていた諸組織団体の統合は、2023年時点でそのほとんどが未実現である。

北見市は人口約11万2,400人を有する道東の中核都市の一つで、道内最大、国内4位の総面積(1,427.6 km²)—東京都の約65%にあたる広さ—で、大雪山連峰を望む石北峠からオホーツク海まで110kmの距離は、東京から箱根に相当する全国一の長さである。中心部は、サロマコ(国内3位の面積)にも接するオホーツク海沿岸の内陸部に位置し、女満別空港にも近く、市内から車で1~1.5時間圏内には、大雪山国立公園、阿寒摩周国立公園など感動の素晴らしい景色に囲まれている。また、北見は盆地で季節的な寒暖差が大きく、夏は30℃超え、冬はマイナス20℃を下回り、メロンやフレッシュな野菜も多く流通するまちであるが、他の都市と同様に年間1,200人ほどが減少してお

り、2040年には人口が9万人を割ると予測され、街の趨勢が懸念されている。



図1 北見市の位置と面積
(出所) 北見市観光協会パンフレットより

北見市では約2万2,000ha という耕作地を活用した農作物、オホーツク海とサロマ湖を漁場とするサケ・マスのほか国内有数の水揚高を誇るホタテやカキの養殖等の資源管理型漁業が盛んである。農業では日本一の生産量を誇るタマネギのほか、新鮮な畜肉が流通している（焼肉屋の多い街）おり、真冬の「厳寒の焼肉まつり」は、風物詩となっている。また、市内中心部に道立病院や日赤病院等の医療機関、冬季スポーツ競技に寄与する研究も盛んな（国法）北見工業大学、日赤看護大などもあり、産学官連携も活発である。その他、ラグビーを中心にしたスポーツ合宿も盛んで、とりわけ、カーリング女子日本代表「ロコ・ソラーレ」の2018年平昌五輪と2022年北京五輪での連続メダル獲得により「北見＝カーリングのまち」という認識も定着している。

オホーツクブルーとミントグリーン

(2) 薄荷の歴史と北見の関係性

北見経済の発展を促したハッカ（薄荷＝ミント）について永田氏から学んだことを紹介する。

ハッカ草(英名：Mint)から蒸留して得られる「ハッカ油」と、主成分である「メントール」は、紀元前から健医薬や消炎剤としての使用、また、歯磨きやシャンプー、うがい薬、張り薬、胃腸薬などの医薬品、ガムや飴に使用されるなど、世界中で必要とされてきた原料である。

日本でのハッカ栽培は、西国から始まった。すなわち、中国からまず、岡山に苗が持ち込まれたのが始まりとされ、その後、関西から群馬、新潟、山形(天童など)の主産地を経て、1897(明治30年)頃から北海道(旭川)で栽培が始まったが成功せず、北見で「成功」一産業化された。

北見市は、屯田兵や坂本龍馬の甥である坂本直寛率いる高知からの北光社移民団によって開拓されたまちである。その開墾された土地を活かし、この山形から旭川経由で持ち込まれたハッカの苗を増殖させたのである。

大正期には本州での栽培がなくなり、それ以降、北見の中心的作物となった。そして、1934(昭和)9年に「ホクレン北見薄荷工場」が建設され、6年後の1940(昭和15)年頃には世界最大のハッカ産地となったのである。

その規模は2万1,000haで、現在の北見市の耕作面積に匹敵するという面積がハッカで埋め尽くさ

れたのである。ちなみに、現在、日本一の生産量である玉ねぎの作付面積が 4,000ha 程度であることを考えると、その広さが桁違いであったことがわかる。

ハッカ栽培の魅力は、グローバルな市場の存在を前提にしたハッカの収益性にある。ハッカは、1反(300坪)から四組(一組=1.2kg)約5kgの収穫があり、当時の金額で40円前後の収入が得られた。これを穀類と比較してみると、畑1反から収穫される穀類は当時100kgで4円(馬1頭で100~120kg)程度のところ、ハッカは同800円、馬1頭分では穀類の200倍の荷物が載せられた。ここから、最終的な荷姿が他の作物とは比べ物にならないほど運搬効率が良かった―薄荷の由縁―のである。

ただし、「世界相場が北見で動く」とも言われた時代であったため、国内のハッカ精製メーカーや仲介業者が当地に集まるようになり、道内有数の繁華街を持つまちとしても成長した。現在の飲食店の多さは当時の名残と言われているが、度重なる戦争と合成原料の開発が進み、昭和30~40年代から中国やブラジルなどの海外産が台頭し始めるとハッカ産業は衰退の一途を辿った。(以上、永田氏談)



図表2 北見薄荷工場

(出所) 北見ハッカ通商ホール模型画像より



ハッカ記念館前 説明後の館長様との集合写真



ハッカ記念館 蒸留設備説明

(3) 北見と「北見ハッカ通商」の関係史

「北見ハッカ通商」は、世界に誇った北見ハッカ工場が閉鎖された翌年(1984年)、これを引き継ぐようにして、筆者の祖父が、経営する永田製飴(株)から脱皮して創業した。1921(大正10)年創業の100年企業の同社に対し、我が社は2024年にやっと40周年を迎える若い企業である。自社の創業当時は、国内経済がバブル期に沸く中にあり、斜陽産業に向かうことに対し「今さらハッカか」という声が多くあったが、世界一のハッカ産地であったことを風化させてはいけないという思いから起業に至っている。当初は「天然ハッカ油とハッカ飴の2本柱」で事業を展開し、道内では観光地、道外にも市場を広げようとデパートの物産展、その他イベントに参加しながらユーザー獲得を目指した。その一方で、ニーズなど全くない中での市場開拓は容易ではなく、経営が軌道に乗ってきたのは、創業から十数年以上経過してからのことであった。2001年新社屋に移り、製造能力のアップした環境で再スタートを切ると、10年後に札幌に拠点を、2013年には農業生産法人を設立し、2haと小規模ながらもハッカの自社栽培にもこぎつけた。

この頃から地場原料を活用した製品開発が進展し、受注が増え始め、本社・工場の規模に伴い2019年に、3軒目の社屋が完成した。これと同時に北見工業大学に「HAKKA LAB」を開設、さらに、筆者も委員として参画していた2年にわたる市の〇〇の策定会議の中で、北見市の観光推進テーマが「ハッカのまち北見」となった。富良野市が昭和30年代からラベンダー栽培を行い、これをテーマとした

観光戦略を打ち出し半世紀が経過したなか、北見では、ハッカ工場閉鎖以降、多くの先人による世界一のハッカ史が再度まちの顔となるまで40年近くも要したこととなる。

また、永田裕一社長は、2022年春、観光庁による補助事業「地域一体となった観光地の再生・観光サービスの高付加価値化事業」が年度で延長されたことで、本事業の組み立てに関し、北見市への提案を行った。結果的には行政の対応が間に合わず、次年度への持ち越しとなり、この2023年度改めて、新たなまちの観光による活性化計画を策定する運びとなったとのことである。

Ⅲ 申請者側での成果と今後の展望

上記で紹介した(1)北見市概観(2)薄荷の歴史と北見の関係性(3)北見と「北見ハッカ通商」の関係史について学ぶことができた。すなわち、申請団体側では、地域課題を精確、正確に把握し、共有するとともに、諸課題について、学生の視点から地域の活性化、関係人口の増加策についてのアイデアの提示を行うこと、和製ハッカを活用した新製品のアイデアづくりや販売(宣伝含む)方法についてのアイデアづくりに取り組みことを継続している。

連携地域・団体と申請団体との連携の具体的成果を生み出していく。また、毎年、振り返りの共同作業も行う。

また、和製ハッカの収穫増のための、ハッカ畑(仁頃地区)での雑草取りについても継続して取り組む。この作業は地味なものであるが、労働力不足の北見地区では、当該企業にとっても大変重要な作業となっている(下記写真参照)。



2023年盛夏のハッカ畑



2023年6月30日のハッカ畑



除草作業とその終了

北見の薄荷（北見市） 仁頃町の薄荷畑 2023/08/19



北見市の新マスコットキャラクター「チョコミントくん」と(於:北見ハッカ通商 キタミントホール)



展示パネルを用いての説明



PP 資料による説明



新設備



新製品 ジェラート



グリーنز北見 丸山勇太営業課課長の講義 玉ねぎの「花」はどれでしょうか？
玉ねぎ、その加工販売におけるアイデア等についても多くを学びました。



②でした。

私たちは、玉ねぎの「葉」を食べています。

日本の玉ねぎの2割を生産している北見のグリーズ北見社は、玉ねぎの加工品として「タマコロ」(玉ねぎのコロッケ)を生産するなど、工夫を凝らしていることを学びました。



宿泊施設での集合写真



二代目「なめらかミント」(学生の命名) 明大マート



(参考)

ロコ・ソラーレのメンバーの皆さんと初代「明大生による明大生のためのハッカ飴」2017年夏